



崖
転落で
異世界
こんに
ちは
参

著者・ろっしゅん

妹情事



茜



お
絹





美
し
き
姿
也
て
人
喰
ら
う

情
欲
の
魑
魅

崖転落で異世界こんにちは参

著者・ろつきゆん

第参幕・根の堅洲國人間界現世において——闇漂を追う——

序章Ⅱ本編——

「馬鹿な……」

咄嗟に仮面を奪い嵌め直す。

だが、時すでに遅く、その女は冷笑とも思える笑みでルージュが色濃く塗られた唇をその舌で舐め上げていた。

と同時に瞬時に普段の人を食ったような笑みに戻し、ほわほわとした、それでいて異常なほど噎せ返る色気をしどけない肢体でくねらし、大地に仰向けに落されたシュラに跨る。と、そのぷくりとした唇をシュラの頬へと当てて来た。

「……天和が怖くてん……、今度はマハラシュトラに逃げたくなったの？ 結局行く道は決まってるんだから学校で他の男子のように鼻の下伸ばして従ってればよかったのに……、わざわざ自殺して、あんなところに言っちゃて、しかも結局向こうが嫌で……死に戻り？ その体、どうやって創ったの？ こっちのはグシャ、って聞いてたんだけど……気になるな。誰が創ったんだろ……、いや、用意されてたというべきかしらん」

甘く、小さな怯えと、苛立ちが沸くような言葉を囁かれる。

「……なんで、お前、黒織部！ お前いつから気づいてた!? ……というか、この体が創られた？」

ころころくすくすと、声を鳴らし。

黒織部が嘲りの笑顔で続けていく——

「まあ、身体はどうだっていいじゃない。それより貴方は現世、人間界にいる。今、何時から気づいてたか？ っていったけど……そうね、さっき助けに行ったときからかな。黒織部先生

なんていっちゃたら、完全でしょ。そして、その夥しい血から見える蒼の輝き。つまりシャクティの血を色濃く宿す者……もう考えるまでも無いわ。牙影は気づいてないみたいだけだねん」

躊躇いも無く。

「ほんつと……性格も、詰めも、甘い男ね」

人の鼻に指を押し当て、眼差しを眇めてくる。

「……」

「そんなんじゃ向こうで生きられないよ？」

「それでも、……生きるんだよ！」

へえ……と馬鹿にしたようにシュラのパーカーのボタンを外していく。

咄嗟に払おうとしたが、左腕につけられた血だらけの腕が痛みを伝えてそれすら出来やしない。

その血を、見た目ほわほわとした妖艶な美女教師が、すくい取るよう舐め上げ、舌で転がしていく。

そしてシュラと眼差しが合うと喜悦に微笑みを浮かべたのだ。

「あの柙の木葉……いや、いまは降魔の木葉？ ヴェーダと同化してるような魑魅に、今の斬九郎ちゃんじゃ勝てないよ。牙影も、あそこまで同化した闇漂人では、あれではとどめがさせないでしょ。いいとこ時間稼いで……後退かなあ」

「強いな、あの女」

「天和の大地を跋扈する者でなら、貴方が戦ってきた誰よりも強いんじゃない？」

「……」

「ねえ、禄武君。いつそ何もかも捨てて、こっちに戻って暮らしたら？ もっとも禄武シュラという男は死んだ事になっているから別の人生を用意しなければなんだけど」

そこで、ふと思う。

本当に葬儀が終わったのなら担任は出席していたのではないかと。

「本当に……死んだのは俺だったのか？」

問う様に尋ねる。と、黒織部はさも愉快と微笑んだ。

「さあねん、退屈な葬儀は出たけどね。潰れた死人の整形顔に興味ないし、だから彩香ちゃん
は、貴方の骸をみてないもん」

「……」

「なに、心配事でもあるのん？」

「……」

それに、シュラは返せない。

だが、その沈黙を黒織部は何か勘違いしたのか。周囲を、見回し、特に牙影の残った方向へ
眼差しを向けていく。

「ははん。察するところ、この彩香ちゃんのみならず、黎弥に生存が疑われるんじゃないかって
心配なのね？ 貴方は向こうでは罪人だとかって聞いているし。大丈夫よ、あの男には私から上
手く、『斬九郎には、天和で、こっちの名と職業を告げてある』とか言って露見しないよう補
足しておけば問題ないでしょ」

人のウナジを弄る黒織部は、甘える猫のように身を摺り寄せてくる。

「あんた、一体……どっちの味方なんだ」

柔らかな指先が胸元に添えられた。

下腹部に乗る黒織部の下腹部から異様な熱が送られてくる。

しかも腰を擦りつけるように艶めかしく動かし、潤む双眸は危険な程に艶を帯びていく。

そして囁かれる言葉は綿毛のように全身を包む。

「し、仕草で誤魔化すな」

つい、放った言葉にクスリと黒織部は笑う。

「ここを飛び出す前の貴方を対象にするなら、教育委員会の味方かな？ でも、現在（いま）
なら違うよ。……間違いないく貴方の味方。禄武シュラ、斬九郎……そして……月に猛る王」
「な、に……？」

「私だって、貴方の嫁候補になれるのよ？」

「意味が、わからな……」

人差し指を口に宛てられて言葉が止められる。
代わりに迫る柔らかな赤い唇がするりと迫り。

「――」

咄嗟にシユラはその唇へ頭突きした。

「いったあい!？」

「痛くない！ 生徒に何考えてんだ淫行教師」

「だってえ、王の嫁になって世継ぎ増やせるんだよ？」

「ふざ、ふざけんな」

「ふざけてないよ。いつも彩香ちゃんの胸みてたんじゃない。言ったでしょ、子供好きだった」「な、に……」

声はつきり出ない。

確実に掠れたのが彼女にも、はっきり解ったはずだ。

そんな動揺するシユラに、彼女は微笑む。

艶ある声で、しどけなく身体をくねらせる。

「……やっぱり、可愛い。シユラちゃんとの赤ちゃん、ほしくなっちゃうん」

そっと、胸元の手が下腹部へ迫っていく。

「ね、作っちゃおうか……ここで」

「なに、言ってるんだ!？」

「この社会が崩落した世界。国の中枢も崩れ、今や爆撃するかの瀬戸際。周囲は瓦礫に亡者の人の死体が転がり、生者の名残を欠片だけ残す世界」

「……」

「そんな中で、新たな生命を、この女として突出してる私の中に宿してみたいと思わない？」
蕩ける程匂いたつ彼女の魅力。

それに伴う優しい甘声。

それは嘲弄を飛び越え、染まってしまういたい危険な香りさえ溢れさせている。

何もかもが心地よく、——だからこそ、シュラは奥歯で頬を噛みしめる。

何故か悲しそうな絹の顔が見えた。

だからこそ叫ぶ——

「そんな事、軽はずみにできない！」

「あら、今時の雑誌やマスメディアに踊らされて子作りしまくる連中と違って、本当に身持ち堅いわね。髪の毛さえ、脱色も、染色もしていない。真面目……希少種よ」

「そうかよ、俺は俺の姿が気に入ってるからだよ」

「ほんとと……良い男。そこらのクズ男とは比べられないくらい魅力的。ますます伝承にある子供を作ってみたいわ……」

黒織部が、その異様に赤い舌でシュラの頬に鼻頭を当てていく。

「伝承の……？」

「そうよ。それって天和でも帝以上に崇拜されちゃう子らしいよ」

そのままウナジへと当て続け。

「そしてその母になる女もね」

「え？」

「だから遂にこの美貌に帝、嫉妬！ とか、思ってたんだけど……あの小娘——」

「小娘？ 一体、さっきから何を」

「いや、なんでもないのよん」

シュラの疑問に慌てて頭を振る黒織部。そしてコホンと小さく咳払い。

「彩香は本気だよ？ どう？ 祝言いってみる？ この我が儘ボディを貴方の物に出来ちゃうんだよ？ 毎晩といわず、こんな世界だもの、毎時間、私を抱けるの。魅惑的じゃない？」

「いません」

「ひどい！ 全校の憧れの美人教師に！……ん、あ！ いま、私が迫った時、誰かの顔が見え

たんでしょ。それでかぁ。誰よそれん」

そこで、シユラは全身を強張らせてしまった。

「図星ね……へえ、誰だろ。一年C組の橋本瑠奈ちゃん？ それともF組の飯田美奈ちゃん？
ねえ、誰、学校で一二を争う彼女らじゃなければ、貴方のクラスの……」

「全然ちがうよ」

シユラは手で黒織部の顔を押し返した。

けど、黒織部の言う通り。

確かに、一人の女性の悲しそうな顔が見えたのだ。

だから、咄嗟に押し返したのだが。

「あんた変わらないな」

「貴方が変わり過ぎなのよん。ここから逃げた時は、どこにでもいる過激に元気なありふれた
馬鹿だったのに……」

「馬鹿はほっとけ」

「でも、急激な強さは危険よん」

「だが拝鵬は救えただろ？」

「……」

嘲弄染みた態度の黒織部に、唐突な言葉は彼女を黙らせる。

それだけで、十分だと思えた。

「やっぱりお前、凜狂だな」

「名など、所詮は人をその地に縛るモノ。それ以上でもなければそれ以下にもなりんせん」

「その口調は凜狂だよ。向こうの、天和の白粉（おしろい）の臭いは、そう簡単に拭えないぜ」

「……」

「なんで、ここにいるんだ」

ふう、と彼女が重い溜息をつく。

顔は目の前、吐息の全てがシユラに当てられていく。まるでこの臭いを覚えてくれとばかり

の行いに、シュラは見せつけるよう鼻を曲げた。本音で言えば柔らかくも癖になる匂いだと思ってしまった。

しかし口では彼女を否定しておきながら、今さら態度に出す訳にいかず、絆されそうな意識に露呈するのを恐れての挙措だったのだが。

もともと、この女には無駄らしい。

真意は読み取られたらしく、小さく微笑が向けられた。

それらを踏まえ、敢えてシュラは強く発言する。

「凜狂なんだろう、駄月はどうしたんだ」

「戦ってるよ……北方の補陀洛（ふだらく）の手勢たちと」

強めた言葉に、肩を竦める黒織部彩香は、いきなり全てを認めた。

「本当に、弥勒の凜狂なのか？」

「まあねん、あちきの名前は弥勒の凜狂。かの天和一の美女様よ」

もう隠す気はないのか、シュラのクラス担任黒織部彩香（24）は、ウィンク一つ、碎けた仕草で宣言する。

「でも、どうして！　なんでこっちで教師をやってるんだ？」

「なんでって、こっちにいる理由は決まってるでしょ。こっちは平和だったから。でも、あの馬鹿女が来た、だから平和は消えた。現在困ってるのよねん」

「木葉の存在か」

「で、教師やってるのわ、さっきも言った通り子供が好きだからよん」

「確か拝鵬もそんな事を言ってたな……子供の為にか。なんか姉弟揃って——」

「拝鵬ちゃんは、子供の身を案じてる子だからねん。でも彩香ちゃんは純粹に好きなの。色欲的な意味合いで。特にシュラちゃんみたいな子が最高」

「……」

少し、彼女の発言に呆れた。

それに伴い話の中で流れた、聞きなれない国の名が妙に惹かれる。

「さっき戦ってるって言ってたけど……補陀……なんだっけ？」

「補陀洛（ふだらく）よ。遙か北方を占める大国。その拠点となる国よ。天和といっても、全てが帝の威光に伏してる訳じゃないの。弥勒はその境を隔てる強固な要害の城にして最強の要。ちなみに、黎弥の海咬もね。で、弥勒は今交戦中になっちゃって、私は逃がされたの。こっちで教師もしてるしねん」

「はっ!? ちょっとまで、アムさんや莉夕（りゆ）ちゃんは!？」

「誘ったんだけど、残るって聞かないのよん。死ぬ時は拝鵬ちゃんと一緒にしたいからって」

「それ……」

「うん？」

「まさか負けそうなのか!？」

「そんな感じね。危ないから私は避難してきたのん」

「あんた学校でも思ってたけど最低だな!」

人を食ったようなイントネーション。

今更ながらの掴みどころのない女に、さすがのシュラも辟易とするが。さらに黒織部はシュラの神経を逆撫でするかのように呆気らかんと言いつつ放ったのだ。

「だって死にたくないんだもん。そもそも彩香ちゃんに何ができるってのよん」

「向こうで何かできるだろ!」

シュラの叫びに、ふいーっと、声を出して黒織部が息を吐き捨てた。

「あのね禄武君。斬九郎？ 斬九郎でいいか。シュラ君は死んだ名だから。斬九郎、あのね。戦いに負けるというのは死ぬ事なの。ゲームやアニメみたいに、『ああ、負けたあ、でも次はこうはいかないぜ! またデュエルしようぜ!（笑顔）』なんて、温（ぬる）い事にはならないの」

「……………」

「負けたら終わり。首を刎ねられるか心臓を潰されるか。いずれにしろ残った骸は転がされてカラスが啄み、首は見せしめに街に廻され、逆らえばこうなると民に喧伝するよう晒され腐ら

される」

にこ、っと柔らかく微笑んだ。

それにシユラは何も言えない。ただ、沸き立つように血がざわつき、やがて得体の知れない何かが腹の底を蠢き始めて遂に怒りが拳を握らせた。

「――!?」

なのに、その拳をいともたやすく黒織部は掴む。
そして自分の前にひっぱりだした。

「甘いね、緑武君……いや、蓬萊の斬九郎。そんなんじや、いずれ殺されるよ。それはこっちの世界でも同じなんだから……」

優しく諭すように語り掛けられる言葉。

それに対しては、シユラは何も返せなかった。
けど、

「この世界の崩壊、誰がこんな事をしてるんだ」

重く感情を殺して問い掛ける。

この女がどうあれ、まずは調べるべき事を知らなければならないと判断したからだ。

「さっきの小袖の女でしょ」

「言いなおす。あれに、明確な東京破壊を主旨にする気配は感じられなかった。奴が狙うのは俺の存在の破壊のみだ。なら、ここまでする必要があるのか？」

「うーん、確かにね。ちよっとおかしいのよねん」

「さっきの奴の会話で見え隠れした、御膳立て。あいつは俺の抹殺が目的だろうが、ここまでの混乱を望む奴が別にいるんじゃないかと思えて仕方がないんだ」

「でも、あれ、間違いなく純粋な闇漂人よ。闇漂人を使役できる存在はいないわ。……ただ、あれが一人で判断したとも思えないのは確かなのん」

「先生、闇漂人とか詳しいね」

黒織部が、ゆっくりシユラの上から身を振り、大地に座り込む。

それに伴い鍊気で傷の修復を試みようと、ただ掌を傷に添えてみる。そして鍊気を放出さ

せてみるが、薄らと目に見えない温もりが現れるだけで傷の治療どころかやはり使用ができない。

さらに傷口から瘴気が色濃く邪魔をしていた。

「くそ……できないか」

「ほんっと、闇漂人の事は貴方の方が詳しいわ。その術といい。これだけの短期間いらないだけだったのに……驚かされる事ばかりよ」

「死に物ぐるいだったからな」

「それなのに人を斬る事には怯えたの？」

「え？」

柔らかな微笑を横顔に浮かべ、共に寝そべる彼女は擦ったそうに微笑みを向けてくる。

まるでどこかピクニックにでも来たような仕草だが。ここは死臭の香りさえくすぶる瓦礫の中の車道の上なのだ。

その落ちつき寝ころぶ姿に少なからず恐れみたいな物を感じさせるが。

「自殺したとか聞かされてたけど、なーんか、今一釈然としなかったのよね。たかが補習で。

マスコミは自然環境の破壊に悲嘆して……だっけ？」

「それは、知らないけど」

「そしたら天和では斬九郎が現れて物凄い力で拝鵬ちゃんを倒すわ。それだけでも驚いてたのに、こっちに帰還して今の公園騒ぎ。しかも凄く弱くなってる」

「……」

「不思議不思議と思ってたら、正体は死んだシュラ君。ほんっと、君って面白いわ——しかも君は何か怯えてる……察するところ、この世界の変貌についてこれなかったか、誰か親しい人を殺めたか。そんな事へ思考が行き着くのは必然でしょ？」

まるで恋人との一時の逢瀬を、河原かどこか穏やかなところで楽しむ様に。黒織部が一方的な持論を捲し立てた。

なのに、剣では素人の様な黒織部にまで見事に言い当てられた事は、シュラにとってもショックで、ただ何も言えず押し黙ってしまう。

そんな彼に彼女は道を指し示した。

「逃げた方がいいわ」

災禍の中心から正反対への道。

そこは、無人でありながらも、闇は薄れ、ただ紅色の明かりを灯している。夕暮れが、近づいているのだ。

そして黒織部はその道を示している。ただ、逃げろ……そう告げている。

「……だめだ、連れがあそこにいるんだ」

「連れ？ さっきも言ってたね。見たの？ 浚われるところ」

「い、いや、デパートと一緒に買い物に来て。でも試着室に入っていくところはみたし。その後——」

「ずっと見てた？ 争った気配はあった？」

見透かすように告げられる言葉。

それにシュラはただ喉を鳴らすしかない。

「どこかで、木葉と入れ替わったのかもね」

『……模倣するのは連中の十八番……』

銅羅の声が頭に響く。

実際助けに駆けつけた公園では、幻術の絹の姿が縛られていた。

なら、目を離れた隙に絹を勾引（かどわ）かした可能性はなくはない。

あれだけの手練れだ。

怯えと迷うシュラに平常は微塵もなかった。なら、それくらいの芸当を魍魎に起こされては、まさに造作もなかったのではないだろうか。

「途中から、ニセモノに……切り替わっていたのか」

「運が良ければ、デパートのどこかで気を失ってるかもねん。まあ……十中八九、殺されてるんじゃないかな？」

「ばかな……」

「馬鹿？ 馬鹿は君よ。相手は魍魎よ。魍魎を使役する闇漂人」

「いや、それにしても、もしも殺されたなら、それくらいは俺でも気配で解るんだ」

「なら、まだデパートのどこかに転がされてるんじゃない？ 少なくとも、あそこにはいないはずよ。気配の察知に自信があるなら公園から感じた？」

「い、いや……」

黒織部の言う通り。相対した鬼や亡者、木葉の気配はあったが、絹の穏やかにも跳ねるような無邪気な気配は微塵もなかった。

……なら、あのざわめくデパートの中に今でも……と、そこまで考え、シュラは疑問がわいた。

あまりに、魍魎や不知モノの事に黒織部が精通し過ぎてる気がしたのだ。

幾ら天和の弥勒の国司の娘、凜狂といえど、ありえない事だ。

しかも、牙影と共に現れた時。あの魍魎の眉間にチョークを一撃入れていなかっただろうか。

闇の光を守る魍魎相手に……少なくともシュラがやったとして、あの女に一手でも入れられるのだろうか。

そして、シュラは有り得ない物を見る。

「……あんた、何者だ？」

シュラは、腰をずらしながら下がっていく。

それに頼杖までついて寝そべる黒織部がきょとんとみつめる。

薄らと残る闇の霧が、引くように流れている。もしかしたら牙影との戦いに一応の決着がついたのかもしれないが。いずれにしろ、黒織部が褥（しとね）にしているのは、誰かが漏らして固まった大量の赤い体液。血溜まりなのだ。

その上で、彼女は微笑みを浮かべて、いまだに悲鳴も上げず楽しそうに見つめている。

「何者？ はてな、どういう事かなん」

「誤魔化すな……さっき言ったよな、俺の方が闇漂人に詳しいとか。でも、天和の人間はシラヌモノは知っていても、闇漂人の事を知らないはず。かつて聞いた話では、人が恐れからモノという言葉霊を宛てて不知やらに弱体の意味を込めた。その時に不知すらを撒く魍魎の長、魍魎。つまり闇漂にも、人の名をあて闇漂人にしたと聞いた。そして、それは民間伝承にさえ消えている。……少なくとも国司たる蓬萊の姫君は知らなかった」

押し殺しても膨らむ震えに躊躇しつつ。せめて抜刀の間合いを得ようとシュラは下がる。な

のに、まるで蛇のような動きで、黒織部は腕の力だけで、下半身を動かさずぬるりとシュラへ異様な早さで迫ってきたのだ。

「な、なん……」

「怯えないで、牙影から教わったからよん」
感情なく、棒読み。

「——う、嘘だ」

「……」

「しかも、俺は自分の傷に手をかざしただけなのに、その術……と言った」

「くひっ」

喜悦に黒織部が嗤（わら）う。

「だからなに？」

「だからじゃない。そもそも何で、お前は天和と日本を行き来できるんだ！ あそこは希少な鏡と、珠、そして太刀において道が開く。さらに開いた先には無数の獣欲に塗れた存在がいて、あんたが、どれだけ強かろうが通り抜けできる訳がない。あそこを行き来できるのは冥廟門から湧き出——」

啞然。と、シュラの顔が凍り付く。

それは今までシュラが浮かべた事も無いような驚愕の眼差しだ。
それをみたからこそ、黒織部は微笑のままに加速する。

シュラが我を戻した時には太刀に手を掛ける暇もない。獲物を丸呑みにしようとしたヘビの如く。黒織部に凄まじい勢いで仰向けに押し倒されたのだ。

太刀が鞘ごと飛ばされ、慌てて掴もうとした手を黒織部の女性らしからぬ力が大地に押し潰してきた。

「——馬鹿……な。嘘だ、ありえない……」

「ううん、馬鹿じゃないよ。嘘じゃないよ。ありえないんだよ。まさに見たまんま」

「見るも、何も……だって……」

……眼差しが、闇の色を広げていく。

恐怖にひきつり揺らす眼差し先で、黒織部の闇は広がり眼窩を飲み尽くす。しかも闇の中で灯された紅の瞳が縦に細められて揺らめいているのだ。

「——あ、うあ……っ!？」

「どう、これが坂を行き来できる理由」

「しっかりとした意識……不知モノ、じゃない。まさか——闇漂人なのか？」

淀む臭気と寂寞とした首都中枢の路上で、仰いで上擦る言葉を放つシュラの鼻頭に、見下ろす黒織部が不気味な面貌のままに鼻頭を擦りつけてくる。しかも危うく悲鳴すらあげそうな状況下で黒織部の顎が開かれ凶悪な鉤歯が剥き出しにされる。

なのに、その気色の悪い姿すら、美しいと思えてしまう。

「改めて挨拶を。彩香の名は、弥勒を根城にする魍魎の姫、珠希しゆきの娘——駄月の凜狂。完全な存在ではないけれど闇漂の姫。よろしくね。魍魎を滅する月に猛る……王さま」

腹の上に跨る——どころか足でシュラの下半身を完全に包み取り、さらにその腕はシュラの両脇から背中を弄る。気づけばやさしく頬を肩に添えられ抱きしめられていた。

背中の錘籠が外れて重い音立て転がった。

黒織部は弄るように額で擦り上げ、シュラの幻術の仮面を引き剥がす。

乾いた音も大地に響く。

必死に身を振るも全ては無駄とばかりに、妖艶な仕草を払拭させた女教師が猥姦のように全身で拘束してくるのだ。しかも腰を執拗に押し付けて。滑るように、淫靡に、そして妖しくくねらせる。

まるで婚期に焦り始める女のような執拗さだと、シュラは蒼褪める。

目の前で黒織部の厚ぼったい唇からぬちよ、ぬちよ、と音が漏れる。

そしてその濡れそぼる唇からもたらされた事実。

気になる一文があって情欲には身を任せられない。

『駄月の凜狂。完全な存在ではないけれど闇漂の姫』

「か、完全じゃないって、魍魎が、なに、いや違う。今はそこじゃない。拝鵬——じゃあ駄月の拝鵬もなのか!？」

焦る言葉に黒織部が甘い匂い漂わす吐息をわざと熱っぽく吹きかける。一息吸えば心臓が跳ねる。夢心地に瞬く間に沈み込もうと体が重くなる。

けど、目の前に迫る闇の眼窩に紅の明かりは灯っている。

周囲が黒織部の身体から放たれる色濃い闇の靄に包まれていく。

「ううん。あの子は人間のパパと人間のママの間に生まれた子。彩香ちゃんの弟になってるけど、正確には異母兄弟の、その子孫。もっとも私には彌勒の血は入ってないんだけどね」

「子孫……」

——なら、今日の前にいる黒織部は。

訝しむシュラの前で黒織部の眼差しが、シュラにはどこか儂げな光が宿った気がしていた。

「でも、私の母は弥勒に未だ住む魍魎なのん。ね、当時の当主。彩香ちゃんのパパは頑張りすぎたの。人の弱さは付け込まれると、人外とまでしちゃうんだから凄いやねん」

さも愉快とほくそ笑む。

——なるほど、なら拝鵬は間違いなく人間だ。

シュラもそれだけは確信する。

でも、そうなると思いの前の女性はとても人の齡ではないはず。と、同時に——

「じゃあ、あんたは……」

シュラの問いの意図に気づく黒織部。

「天和という混じり物。こっちでいえば雑種？ 混血？ ううん、今は舶来語に逃げてハーフかな。でも、ずっと城に住んであの一族を見守ってきたんだよね？」

ケラケラケラ、つと小馬鹿にしたように笑みをむける。

それを見るだけでも本物の魍魎かもしれない……。そうシュラは思っ、ただ必死に逃げようと足掻いていた。

「だーめ、初めて結婚してもいいかなって思えた人だもの。しかも年下。逃がさないんだからねん」

「はつきり聞いてやる、一体幾つだあんた!？」

「女に年齢聞いちゃう？　でも、安心して、今の子が大好き処女だよ？　まだ、誰とも婚儀してないもの」

ちろ、っと妖しく唇から赤い舌が覗く。

そんな様相とは裏腹に、強靱な四肢によって絞められる彼女の膂力は尋常じゃない。とても逃げられない。

しかも怯えるシュラの前で、闇が霧散する。

眼差しが人に戻される。

「拝鵬が私を嫌ってた訳……少しは解った？」

「ああ。ついでに国司の姉が化け物だと、征夷大將軍に露見したら駄月一族の位の剥奪もある。それを憂いているからだ」

「——正解。でも力無ければ弥勒は北方を死守できない。それに付け込まれて何代も前の頭首、義理のパパは母の言いなりに身を舐（ねぶ）られたんだけどね」

今の黒織部を見る限り、シュラもよく理解できる。

あまりに妖艶。そして、絶大な力がある。

なにより先の柿崎と猫谷。あの二人のように、易々と人は化け物として傀儡になれる。

そして亡者すら両断する力が得られるのだ。

時の権力者たる駄月の先祖は、とても無碍に断るなどできなかったのだろう。

そして、妖艶な女性も手に入れられるとならば。

「——あ」

一瞬、漏れた本音。

それを見透かすよう、黒織部が双眸を細めていく。

一瞬赤く染まった頬は、たぶん、シュラと同時だ。

だからこそシュラは絆されないよう頭を振る。